学生自主企画サマーセミナーの発端

The origin of the summer seminar as the student independence project

○中桐　貴生*
NAKAGIRI Takao*

1．はじめに

昨年8月末に開催された農業農村工学会の学生会員の自主的な企画によるサマーセミナーは，本学会前身の農業土木学会の時代を含めると10回目を迎えた．第1回目および第2回目の開催の際，企画担当者の1人として加わり，第3回目もオブザーバとして参加した筆者にとっては，サマーセミナーには強い思い入れがあり，10年以上にもわたり，この企画が継続されてきたことは大変喜ばしく感じられる．本稿では，第1回目のサマーセミナー開催に至るまでの流れと，当時の企画担当者としての考え方を紹介し，また，サマーセミナーをはじめとする学生主体の活動に参加することの意義を筆者の経験を踏まえて述べていきたい．

2．第1回サマーセミナーの開催に至るまでの流れ

(1)全国規模での学生ネットワークの構築

第1回目のサマーセミナー開催に強く関わったであろうと思われる主な動きを **Table 1** に整理した．

1992年12月に本学会内にスチューデント委員会が発足した．スチューデント委員会では，学生会員へのサービスをより充実させるべく，様々な活動が企画・実施されてきた．その一環として，「海外学生研修旅行」（第1回：1993年8月 インドネシア 7大学16名の学生＋7名の教員，第2回：1994年8月 台湾 6大学21名の学生＋4名の教員，第3回：1995年8月 アメリカ 9大学19名の学生＋2名の教員）が開催された．また，当時の委員会メンバーを中心とする各大学の先生方の誘導により，1994年7月，金沢での学会全国大会時に学生会員を主体とする若手懇親会（7～8大学からの学生約30名参加）が初めて開催され，これに参加した学生が自分の，あるは近隣の大学の学生にも声をかけ合い，翌年7月に宮崎での全国大会時に第2回目の若手懇親会（学生約80名参加，大学数多数（詳細不明））も開催された．

こうした，複数の大学の学生が集まって交流できる機会が増えてきたことにより，他大学の学生間でのネットワークが急速に強まり始めた．また，大学間での通信手段としてE-mailが普及し始めたのもこの頃である．全国大会時における若手懇親会が定例化し始めたことにより，参加者から「この会のように気軽に集まって，いろんな話をできる場があるのは大変有り難いが，これ以外にも，何かのテーマについて学生同士で真剣に議論できるような場も作れないだろうか.」という意見も出されるようになってきた．こうした流れにより，学生が自主的に何かを企画・実施する「土台」ができ始めた．

なお，これまで，サマーセミナーをはじめ，学会全国大会時に開催されている若手懇親会など，いくつかのイベントが学生の自主企画として開催

Table 1　第1回目のサマーセミナー開催に至るまでの流れ

年	月	日	サマーセミナー発足に強く関わる動き
1992	12		スチューデント委員会発足
1993	8	22	第1回海外学生研修旅行（～9/1，インドネシア）
1994	夏		宇都宮，東京，東京農工3大学合同ゼミナール
	7	20	第1回若手懇親会（全国大会@金沢　参加者約30名）
	8	22-27	第2回海外学生研修旅行（台湾）
1995	1	17	阪神淡路大震災
	3		阪神淡路大震災調査プロジェクト研究委員会（～1996年3月）
			学生通信員（岡山大，京大，東大，新潟大，農工大，三重大）開始
	7	24	第2回若手懇親会（全国大会@宮崎　参加者約80名）
	8	18-26	第3回海外学生研修旅行（アメリカ）
	12	20	震災調査プロジェクトに参加した若手研究者による座談会①（京都）
1996	1	6	★震災調査プロジェクトに参加した若手研究者による座談会②（東京）
	6	18	第3回若手懇親会（全国大会@山形　参加者約90名）
	7	22-24	第1回サマーセミナー開催（宇都宮大学附属日光演習林）

*大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 Graduate School of Life and Environmental Sciences, Osaka Pref. Univ.
キーワード：学生自主企画，サマーセミナー，発端

されてきたが，学生の自主企画とはいえ，ほぼ全ての企画において，本学会事務局スタッフ，本学会スチューデント委員会，ならびに多くの大学および研究機関の関係者等，数多くの方々による支援が少なからずあるからこそ，継続的な開催に結びついているということは認識しておくべきであろう．

⑵震災調査プロジェクトの活動とセミナー開催の発案

1995 年 1 月 17 日に発生した阪神淡路大震災の調査プロジェクト研究委員会が本学会内に同年 3 月に発足し，農業土木的観点からみた被災状況についての調査が実施された．このプロジェクトでは，大学教員と学生の混成（教員と学生の所属大学は異なることもあり）で 6 つのチームが編成され，チームごとに独立して活動が行われた．チームとしての活動成果については，学会誌（63(11),1995）への掲載やシンポジウム（宮崎全国大会，1995）の開催を通じて報告・討議がなされてきたが，プロジェクトに参加した学生間だけでも議論してみてはどうかという話が持ち上がり，そこでプロジェクトに参加した学生 3 名が幹事となり，震災をテーマにした座談会を企画することとなった．当時の学生会員（約 700 名）全員に座談会の案内を郵送したところ，全国各地から参加希望者があり，より多くの希望者が参加できるよう，京都（1995 年 12 月，14 名参加）と東京（1996 年 1 月，12 名参加）で 2 回開催されることとなった．

どちらの座談会でも，プロジェクトに関わる事項のみならず，学会のあり方や学生会員のネットワーク整備や活動等についても熱心な議論が繰り広げられた．学生会員の活動に関する議論の中で，参加者の 1 人から，1994 年夏に宇都宮，東京，東京農工の 3 大学合同で開催されたゼミナールへの参加経験談が紹介され，その詳細を聞くうちに，座談会出席者の多くがこれに関心を持ち，自分たちでも実際にこのような企画を全国規模でやってみようということになった．これが，現在も続けられているサマーセミナーの最も直接的な発端であるといえよう．

その後，当時，スチューデント委員会のメンバーであった筆者が，委員会で企画案を提出し学会からの支援を要請したところ，サマーセミナー開催案内文の学会誌への掲載や講師旅費の一部負担等の支援を頂けることとなった．また，当時，宇都宮大学の院生であった松井宏之氏に企画代表者を務めていただくよう打診したところ，ご快諾下さった．こうして，宇都宮大学附属日光演習林にて第 1 回目のサマーセミナーが開催されることとなった．

3．サマーセミナー企画にあたっての考え方

筆者自身がまだ学生で，こうした企画に積極的に携わっていた当時，もっと過去にも学生らが自主的に企画したイベントが何度か開催されていたとの話を何人かの先生方からお聞きしたが，企画の引き継ぎがなされなかったためか，いずれも「単発的な」開催に終わっていたようだった．そこで，まずは，イベントの「持続的な開催」を目標にしようと考えた．また，座談会の経験から，1 泊 2 日程度で実施されるセミナーの内容を充実させるためには，参加者それぞれにそれなりの予習（テーマに対する発言の整理）が必要であると感じられた．こうした観点を踏まえ，企画・運営の際，以下の点に留意した．

①全員参加型での企画実施．
②負担の分散化．（企画代表者等，特定の人間に負担をかけすぎないようにする．）
③計画的な引き継ぎと，次期リーダーの育成．
④企画の簡素化と中身の重視．
⑤なるべく早期のテーマおよび参加者の確定．
⑥参加者への予習の徹底．
⑦当日の雰囲気作りへの配慮．（＝消極的あるいは人前で発言の苦手な参加者でも発言しやすい環境作りに最大限努力する．）

4．サマーセミナーに参加することの意義

筆者自身の経験上，学生自主企画としてのサマーセミナーに参加することの意義としては，例えば以下のようなものが挙げられる．

①生涯深くつき合え，また研究・仕事上の相談ができる仲間ができる．
②尊敬できる人に出会い，自分を感化させられるチャンスが得られる．
③同じ悩みを持ち，共感し合える人と出会える．
④物事を企画するノウハウを身に付けられる．
⑤自分の人生観，価値観を広められる．
⑥似たレベルの者同士で本音の議論ができる．

5．おわりに

学生時代に，研究以外にこうした活動を行うことは，確かに時間的ロスはあるが，逆に得られるメリットも少なくないと思われる．

また，今こうして振り返ると，学生会員の活動に対し，学会事務局，各大学教員ならびに研究機関の方々からいかに多くの支援がなされてきたかが再認識された．改めて深く感謝するとともに，これに報いるべく，今後は，学生の活動を支援する側の立場として貢献していきたい．